2023年4月23日 日曜日

海外在留邦人が抱える心理的問題から見る言語と異文化コミュニケーションスキルの関係

主題

- 研究結果から見られるように、相談者の７８％が、＜対人関係の問題＞を抱えていて、次いで＜フランス社会における適応困難＞と、＜精神的な問題＞が、挙げられました。

	対人関係の問題	仏社会における適応困難	精神的な問題	コロナ禍における影響	子育ての問題	貧困	器質的疾患・身体症状
相談者の人数	163	153	153	103	76	37	18
全体の相談者210名に対する割合	78%	73%	73%	49%	36%	18%	9%

- 今回の結果は、異文化・異国で生活する場合に抱えやすい海外在留邦人全体に該当し得る問題が現れていると言える。コロナ禍で、従来の対人関係の確立と維持が、より困難になり、社会活動の制限により従来の環境よりも社会適応を阻害された事により、海外生活者特有の２つの問題がより顕著に表面化したと考えられる。

- 海外生活は、異文化適応の問題や社会資源活用の制限などにより、精神的ストレスを抱えやすい。海外生活が及ぼす精神的な影響として、言葉、文化・習慣、対人、生活などの環境が一変し、孤立感、不全感、不安を感じることにより、周りへの不信感、失望感を抱きやすくなる。その結果、孤立感に拍車をかけやすくなると指摘されている。[1]　夫婦・カップル関係においては、異文化間の結婚は独自の難しさがあり、例えば育児方法の違いなどにより、関係性に多文化的要因が影響を及ぼすことも珍しくない。家族関係についても、家族関係自体に主要因があると言えども、その問題の背景には、社会・文化・言語的な問題が絡んでいるが

[1] https://www.uk.emb-japan.go.jp/itpr_ja/iryo_mhealth.html

あることが多い。もちろん、文化背景の異なる人と信頼関係を構築するための異文化コミュニケーション「スキル」 も、海外在留者自身に求められる(Pedersen,1989)[2]。これは、在フランス邦人特有というわけではなく、異文化・異国に生きる”外国人”にも同様の体験が認められ（McRae, 2020)[3]、本研究結果においても、同様の様態を示したと言える。

- では、異文化に適応する際に必要とされる”異文化コミュニケーションスキル”とは、どう言うものなのだろうか。
- 異文化コミュニケーションとは、”文化的背景が異なる存在同士のコミュニケーション”[4]のことで、一つの現象、事柄に対しても、お互いの社会的立場やジェンダー、政治的背景、その時の精神状態、アイデンティティによって、解釈は双方全く異なることもある。
- それにより、”異文化コミュニケーションスキル”とは、異文化間のコミュニケーションで生じる誤解や摩擦の問題に対応するための, コミュニケーションで浮かび上がる様々な要素と特殊性を理解するスキルと言えるだろう。
- 久津木氏の＜バイリンガルの言語発達について＞[5]によると、バイリンガルとは、２つの言語を併用する人を指す。そして、言語能力（スキル）として考えた時に、言語接触時期が重要になる。２つの言語が、いつどのような順序で習得されたかという＜時間的見地＞からみた場合、１ー同時バイリンガル（simultaneous bilingual = Bilangue simultanée) と ２ー継続、または連続バイリンガル（sequential bilingual = Bilangue séquentiel) に分類される。同時バイリンガルとは、”幼児期に同時に２つの言語に接する機会があり、同時に両言語を習得している子ども、または、そのような家庭を経て２言語を獲得した個人”を指し、連続

---

[2] Pedersen, P. The effect of secrecy on the international educational exchange of scientific knowledge. International Journal of Intercultural Relations, 13, 485-499. (1989).

[3] McRae J : 日本での異文化間カウンセリング-日本に住む欧米人が抱える困難. 精神療法,46(2),182-185 (2020)

[4] 久米昭元・長谷川典子 『ケースで学ぶ異文化コミュニケーション – 誤解・失敗・すれ違い』 有斐閣 2007年

[5] https://www.jstage.jst.go.jp/article/sjpr/49/1/49_158/_pdf/-char/ja

バイリンガルは、”第一言語がある程度習得された段階で第二言語に接触した子供、または個人”[6]を指す。

- 一般的にバイリンガルと聞くと、２つの言語を両方とも完璧に操れると思いがちであるが、例え日本語を第一言語として習得したモノリンガルの日本人であっても果たして日本語を完璧に操れていると言えるのだろうか。状況によっては得意、不得意な分野があるのはごく自然なことで、バイリンガルにも同様のことが言えるだろう。これを踏まえて、私達が想像しがちなバイリンガルとは、両言語の能力が各言語のモノリンガル母語者の能力と同等である＜二重バイリンガル（ambilingual)＞ないし、＜ 均衡バイリンガル(balanced bilingual)＞ 両言語の能力に差がなくバランスが取れていると呼ばれるものであり、実際には、存在し得ない。なぜなら、バイリンガルの２言語の能力は常に変動しており、２言語間の優劣は常に入れ替わりを繰り返してしているからである。

- 異文化コミュニケーション能力を考える上で、バイリンガルの＜言語の切り替え（＝コードスイッチング）＞は、重要な要素であると考える。言語の切り替えとは、状況や相手によって意識的に言語を変える現象の事で、モノリンガルの場合、４歳で状況によってスタイルの変化が可能であると指摘されている[7]。それに対して、同時バイリンガル児は２歳前後に言語そのものを意図的に切り替えようとし、３歳半までに相手によって言語を切り替えることが可能であると報告されている[8]。バイリンガル児のこのような能力の早期発達は、言語の切り替えを行う場面がモノリンガルに比べて早い時点で、多く起こることで、言語のスタイルとその機能を早く習得するのではないかと考えられる。

- 同時に２言語を習得したバイリンガルは、２つの言語を習得する際に、一つの事柄に対して、２つの解釈が存在することを早い段階から学ぶ。それによって、他者理解に関する心理発達とも関連性があると言われている。バイリンガル児は、相手の話しやすい、または話しやすいだろうと思われる言語を素早く察知し、切り替えるのである。物事には、いくつかの違う解釈が存在するという事を理解しているからこそ、コミュニケーションで生じる双方の違う点を、あまり抵抗なく

---

[6] https://www.jstage.jst.go.jp/article/sjpr/49/1/49_158/_pdf/-char/ja

[7] Ervin-Tripp, S., & Mitchell-Kernan, C. (1977). Child discourse. New York: Academic Press.

[8] De Houwer, A. (2005). Early bilingual acquisition: Focus on morphosyntax and the separate developmemt hypothesis. In .J F. Kroll& A. M. B. DeGroot (Eds.), Handbook of bilingualism (pp. 30-48). Oxford: Oxford University Press.

受け入れ、柔軟に対応するのではないかと思われる。コミュニケーションには、言語コミュニケーションと非言語コミュニケーションが存在し、コミュニケーションの約６５％ー９０％を非言語が担っていると言われている[9]。発せられた言葉と相手の態度が一致しない場合、人間は、言葉以外のメッセージの方を信用する傾向にある。非言語コミュニケーションには、表情、アイコンタクト、身振りなどの＜身体動作＞、皮膚や髪の色などの＜身体特徴＞、対人距離などの＜空間の使い方＞から、手を握ったり、抱きつくなどの＜接触行動>、咳払いや声の高低などの＜準言語＞、服装、装いなどの＜人工品＞、＜環境要素＞、時間を守ることや遅刻などの＜時間の使い方＞、これらすべてが含まれる[10]。ここで、先に述べた異文化コミュニケーションスキルについて考えてみると、これら多くの非言語要素が形成する場＝コンテキストと、言語としての＜言葉＞を理解する事両方が、異文化社会への適応には必要とされるのである。この観点から、バイリンガル児の言語の切り替え行動は、コンテキストを理解し、言語を選択し、双方にとって建設的な関係を構築しようとする積極的かつ柔軟な行為だと言えるのではないだろうか。

- 異文化社会への適応困難とは、文化背景の異なる人々と接する機会が増えることで、誤解と摩擦が増え、ストレスが溜まり、否定的な態度と混乱を招いてしまう事である[11]。異文化コミュニケーション能力とは、この異文化コミュニケーションでの摩擦や誤解を極力避け、双方に満足いくような建設的な関係を築く能力[12]と言えるだろう。そのためには、いろいろな文化があることを認識し、異なった価値観やその違いに対する違和感、不安、恐れ、嫌悪感などの感情をコントロールし、客観的にその事象や相手を分析し、出来る限り共感する態度を養うことが重要だと思われる。

---

[9] Mehrabian, A. 1981. Silent Messages: Implicit Communication of Emotions and Attitudes. California: Wadsworth.

[10] Knapp, M. 1972. Nonverbal Communication in Human Interactions. New York: Holt, Rinehart&Winston.

[11] 八代京子、町恵理子、小池浩子、吉田友子『異文化トレーニングーボーダレス社会を生きる』三修社、pp.13 - 14. 2009.

[12] 八代京子　異文化コミュニケーションと国際理解
http://id.nii.ac.jp/1046/00000193/

- 海外で生活する日本人には、第二言語習得の際に、全ての認知活動が母国語である第一言語を通して行われる従属型バイリンガル[13]も多い。その場合、先に述べた理想論的＜二重バイリンガル＞になる事への憧れ、海外生活への憧れから来る期待やプレッシャーによる興奮状態が海外滞在初期には起こる。それにより、次の段階では、疲労感や、現実とのギャップによる自己肯定感の減少も起こり得る[14]。ただ、いくら言語能力が高い人であったとしても、異文化衝撃（カルチャーショック）や異文化社会への適応困難は同様に報告されており[15]、言語能力は一概に異文化コミュニケーショ能力において、最も重要であるとは言い難い。また、従属型バイリンガルも、同時バイリンガルと同様に均衡バイリンガルには成り得ない。なぜなら、第一言語上にしか第二言語は構築されず、第二言語が第一言語を上回る事がないからである。そして、各言語には文化的背景も含まれており、母国語は、その観点から、その人の常識、価値観を形成する大きな要素となる。人間は、常に経験という情報を使って、現在起こっている事象や相手を判断する。この時、重要になるのが文化が根底にある価値観であり、自分の価値観でのみ、事象や文化背景の違う相手を判断することにより、異文化の違いは否定的に捉えられ、負の感情が増幅することになる。その点において、同時バイリンガルの特性である価値観の融通性と柔軟性は、異文化滞在において大きな鍵となるのではないだろうか。

---

[13] Weinreich, U. (1953) Languages in contact. New York: The Linguistic Circle of New York.

[14] Adler, P. "The transitional experience: An alternative view of culture shock," Journal of Humanistic Psychology, 1975.

[15] 熊谷ユリヤ　異文化滞在者　https://core.ac.uk/download/pdf/230252157.pdf